

細田北遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業(西部山麓地区)
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1990年3月

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

細田北遺跡

農林漁業用揮発油財源身替農道整備事業(西部山麓地区)
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1990年3月

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

序

現代社会の変化に伴なって、各地で様々な開発事業が活発に行なわれています。当飯田市においても、社会状勢に対応して道路建設も各所で行なわれており、伊賀良・山本地区の上段山麓地帯の活性化を目的とした西部山麓線の新設も全市的な土地利用の均衡をはかる上でも時を得たものといえます。

しかしながら、古代の先人達の残した文化遺産（遺跡）の破壊という、取り替しのつかない事実も伴なっており、そこで次善の策としての記録保存により後世に伝えるために発掘調査という事業が、行なわれるわけあります。

西部山麓地区の道路建設に伴なう、遺跡発掘調査も昭和60年度に始まり、道路建設も順次進んでまいりました。

本報告書はこの道路建設にかかる、2冊目のものであり、中央アルプス山麓の古代史の一端を示すものといえます。

先人達の足跡が、我々の眼前に示されるのが報告書であり、それが記録保存そのものといえ、また出土遺物のそれぞれが何か語りかけている様な想いがいたします。

この報告書で示された歴史事実が、皆様のはるか古代を考える一助になれば幸いです。おわりに、調査実施にあたって種々ご協力をいただいた、関係者各位に心から感謝申し上げます。

平成2年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　　言

1. 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業西部山麓2期地区道路建設に伴う、飯田市北方「細田北遺跡」発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は長野県下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 本遺跡は新発見であり、隣接地の小字から細田北遺跡の名称を与えた。また、現地調査から整理作業にあたり、「HSK」の略号を用い、整理図面類及び遺物等についてこの略号に基づき記録保存した。
4. 本書は、調査員全体で検討の上、佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行ない、小林が総括した。
5. 本書に掲載した図面類の、整理・遺物実測は佐々木が行なった。なお、整理作業実施にあたり、調査員及び整理作業員が補佐した。
6. 調査区グリットは5m方形とし、道路センターに沿って設定した。調査区が道路のカーブ部分であり、グリット方向がやや異った。グリット番号は南西端から北東へA～Kとし、センターを中心に北西側を3～1、南東側を4～7とし、双方を組み合せてグリット名とした。
7. 本書に掲載した造構図の中に記した数字は、それぞれの穴の深さ（周囲の平坦面からの）をcmで表わしている。又■は土器片と出土した位置を、△は石を表わし、図版に載せたものは▲にしてある。
8. 本書に掲載した石器実側図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で、主要剥離面の打撃方向を矢印でそれぞれ実測図外側に示した。
9. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序

例 言

I 経 過	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	2
II 遺跡の立地と環境	5
1 自然環境	5
2 歴史環境	5
III 調査結果	8
1 縄文時代	8
1) 3号住居址	8
2) 土 坑	10
3) 性格等不明の穴	12
4) 造構外出土遺物	13
2 弥生時代	14
1) 1号住居址	14
2) 2号住居址	15
IV まとめ	17

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図 2 調査位置及び周辺図	4
挿図 3 調査区造構全体図	6
挿図 4 HSK 3号住居址・土坑 3	9
挿図 5 HSK土坑 1	10
挿図 6 HSK土坑 2	10
挿図 7 HSK性格不明等の穴	11
挿図 8 HSK性格不明等の穴	12
挿図 9 HSK 1号住居址	14
挿図10 HSK 2号住居址	16

図 版 目 次

第1図	HSK 3号住居址出土土器・石器	20
第2図	HSK 3号住居址出土石器	21
第3図	HSK土坑1・土坑2出土土器・石器	22
第4図	HSK土坑3・穴出土土器・石器	23
第5図	HSK穴・遺構外出土土器・石器	24
第6図	HSK遺構外出土土器・石器	25
第7図	HSK 1号住居址出土土器・石器	26
第8図	HSK 2号住居址・穴・遺構外出土土器	27
第9図	HSK遺構外・3号住居址出土石器	28
第10図	HSK 1号住居址・2号住居址出土石器	29

写 真 図 版 目 次

図版1	細田北遺跡調査区・遺構分布状態	32
図版2	3号住居址・土坑1・土坑	33
図版3	土坑3・性格等不明の穴・1号住居址	34
図版4	1号住居址・2号住居址	35
図版5	3号住居址出土土器・石器	36
図版6	土坑1・土坑2・土坑3出土土器・石器	37
図版7	性格等不明の穴・遺構外出土縄文時代中期土器	38
図版8	遺構外出土縄文時代後期土器・遺構外出土石器等	39
図版9	1号住居址出土土器・石器	40
図版10	2号住居址出土石器	41
図版11	調査風景・伊賀良北方区議員視察	42

I 経 過

1 調査に至るまで

飯田市西部の山本・伊賀良地区の活性化を目途とした農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の西部山麓地区的建設工事は、伊賀良地区南西端からⅠ期工事として着手された。

それしかかわる埋蔵文化財の調査は、昭和60・61年度において、飯田垣外・火振原・梅ヶ久保の3遺跡について行なわれた。

引き続き、Ⅱ・Ⅲ期の工事計画が具体化し年次計画で進められる農道整備に先立ち、その用地内における埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、昭和62年10月1日長野県教育委員会・長野県下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の三者による現地での保護協議を行ない、具体的な方向付けがなされた。

その結果、Ⅱ期工事の最西端部にあたり、細田沢川と南沢に狭まれた、やせ尾根状の小台地は、遺跡としては未登録であるが、隣接する地点より黒曜石片が採集され、地形的な状況からも遺跡である可能性が強いと判断された。

現地協議に基づき、昭和62年10月28日付で長野県教育委員会より、当該地を新発見の遺跡として、事前に試掘調査し、その結果により本発掘調査の要否を判断する旨の通知がなされた。

県教育委員会からの通知を基に、長野県下伊那地方事務所と飯田市教育委員会との間で試掘調査実施の委託契約を締結し、昭和63年11月14日から当該地での試掘調査を行なった。それにより、縄文時代の土器片及び石器等が出土し、遺跡であることが確定した。隣接地の小字から「細田北遺跡」の名称を付して、改めて本発掘調査を実施する必要があると判断した。

その後、下伊那地方事務所と飯田市教育委員会との協議を踏まえ、平成元年7月24日本発掘調査実施についての委託契約を締結した。それにより、7月26日から現地での発掘調査に着手し、記録保存することとなった。

2 調査の経過

平成元年7月26日より、表土剥ぎ及び樹木撤去のために重機を入れ調査に着手した。

表土剥ぎを重機により行なったが、用地内の台地中央部を活用中の市道が横断しており、南北に分割しての作業となった。そのため一部に未調査箇所も生じたが、平坦面のほとんどについて調査実施した。

遺構測量等諸作業進行上、 5×5 mのグリッドを道路センターに沿って設定し調査を実施した。地表下20~30cmのローム層上面で遺構の検出作業を行ない、縄文時代中期・弥生時代後期の竪穴住居址及び土坑などの遺構を確認した。続いて各遺構掘下げ調査・写真撮影・実測作業等を行ない、

8月11日に発掘作業を終了した。

引き続いて飯田市考古資料館において、現地で記録した図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記・土器の復元作業・遺物の実測・写真撮影等の諸整理作業を行ない、報告書を作成した。

3 調査組織

(1) 調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之 功力司

作業員 北村重実 木下当一 高橋収二郎 高橋寛治 萩原和一 細田七郎

松下直市 松島卓夫

整理作業員 池田幸子 唐沢古千代 川上みはる 木下玲子 柳原勝子 小平不二子

田中恵子 丹羽由美 牧内八代 牧内とし子 松本恭子 宮内真理子

吉川悦子 吉川紀美子 吉沢まつ美 林勢紀子 森信子 南井規子

福沢育子 福沢幸子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村 隆彦(社会教育課長)

中井 洋一(社会教育課文化係長)

小林 正春(社会教育課文化係)

吉川 豊(")

馬場 保之(")

功力 司(")

土屋 敏美(")



擇図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図

- 1 郷田北遺跡 2 飯田垣外遺跡 3. 火振原遺跡 4 梅ヶ久保遺跡
- A 西の原遺跡 B 立野遺跡 C 与志原遺跡 D 上の平東部遺跡 E 寺山遺跡
- F 六反田遺跡 G 大東遺跡 H 酒屋前遺跡 I 泷沢井尻遺跡 J 小垣外(辻垣外)遺跡
- K 三苔淵遺跡 L 上の金谷遺跡 M 中島平遺跡 N 宮ノ先遺跡 O 鳥屋平遺跡
- P 殿原遺跡 Q 小垣外・八幡面遺跡

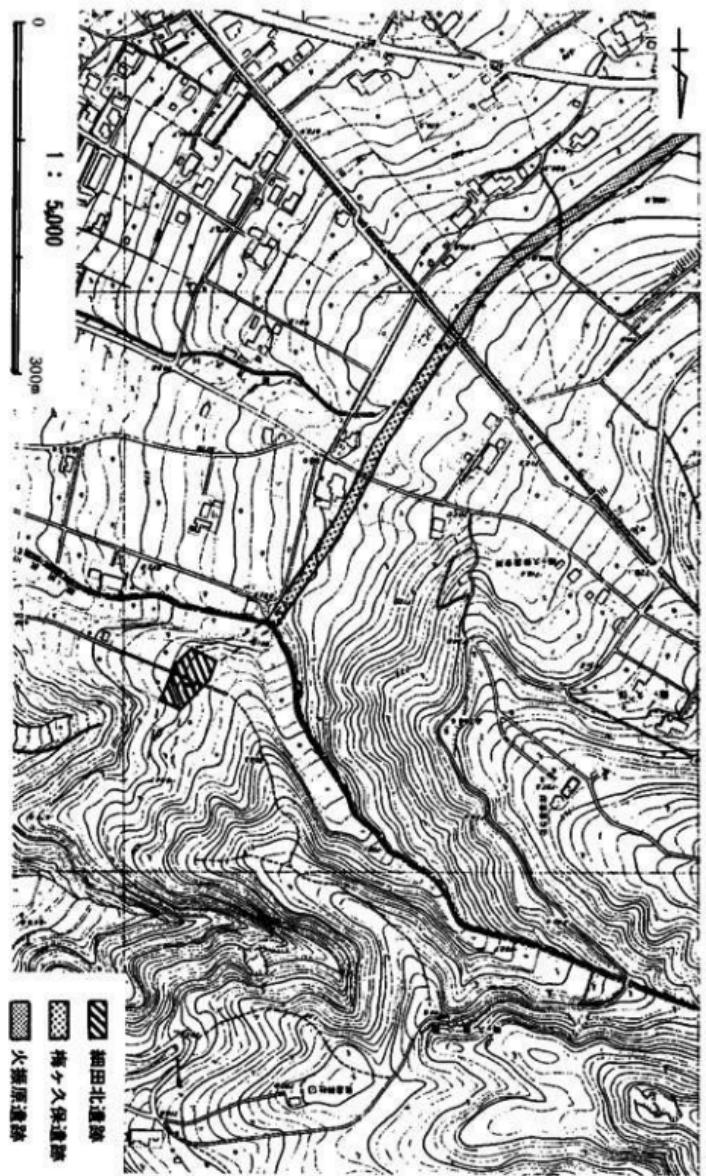


図2 調査位置及び周辺地図

II 遺跡の立地と環境

1 自然環境

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西4～2kmに位置し、北西半分は中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上、東南半分は扇状地を載せている段丘上にあり、両者が連続した地形上に立地している。

細田北遺跡は、飯田市北方3454-1に所在する。北方地区の西隅に位置し、小さな谷をはさんで大瀬木地区と接している。調査地点の北西方向50m程で急峻な山麓部となり、調査地点は標高680m前後の山麓が終息する場所で、南北の巾70～50m、遺跡範囲と考えられる東西長は約400m、その比高差約30mとかなりの傾斜を持つ狭小な尾根状を成す。大瀬木地区に接する側は細田沢川の谷で比高差5m程、巾20mを測り以前は水田が営なまれ、現在は果樹園になっている。北東側は南沢の谷が深く切れ込んでおり比高差50m前後を測る。

遺跡は戦後開拓された所で、それ以前は地区民共同の草刈場であった。現在は、造園業者の庭園木養成圃場になっている。この圃場が台地上半分に位置し、下半分は果樹園である。

台地巾が狭く、30°近い傾斜地のため表土の流出が著しくローム面まで30cm以下で、そのローム層も1m前後で花崗岩の風化した基盤になる。

以上記したように、狭隘な舌状台地に生活の拠を定めた古代の人々の足跡が、この遺跡である。

2 歴史環境

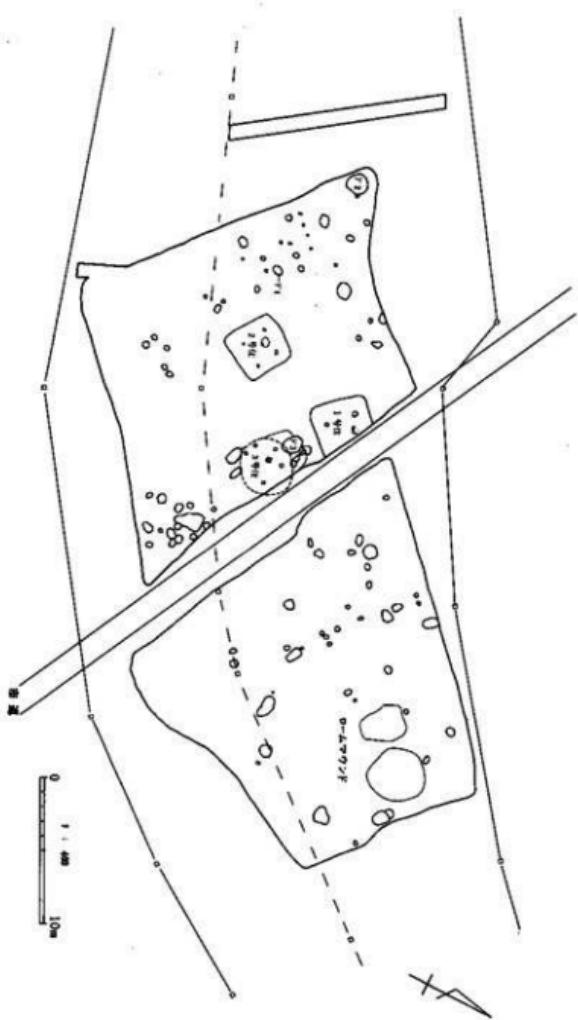
伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といつてよく99遺跡を数える。調査がなされた遺跡は当広域農道に伴なう発掘調査で飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡（注1）、学術調査による西の原遺跡（注2）・立野遺跡（注3）、中央自動車にかかる調査で与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壱瀬・上の金谷各遺跡（注4）、諸開発に伴ない中島平（注5）・宮ノ先（注6）・酒屋前（注7）・鳥屋平（注8）・殿原（注9）・八幡面・小垣外（注10）・下原（注11）各遺跡などである。

縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地域といえる。

特に本農道の先線に位置する立野遺跡は戦後間もなくから數度の調査がなされ（注3）、縄文時代早期押型文土器の標準遺跡である。しかし遺跡は耕地整理・土取り等により消滅状態に近くなっている。

中央自動車道に伴なう、各遺跡の調査では各期の住居地等遺構が調査され、扇状地中央部付近の遺跡状態が明確にされた。

海図3 調査区遺構全体区



農業改善事業に伴なう、中島平遺跡では縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代の遺構が調査され、扇状地端の小さな舌状台地の遺跡のあり方が注目された。

伊賀良地区内の古墳は52基（注12）が数えられているが、現存するものは数基である。古墳分布は飯田松川に面する扇端部、新川両岸の台地端部などに並ぶ。その他散在する古墳が僅かに見られる。今回調査の西方約300mの梅ヶ久保地籍に、梅ヶ久保古墳の記録（注12）がある。飯田市内の古墳の中で最高位に近い古墳であるが、現在は位置の確認もできない状態である。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名がある。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるが、その所在は確認されていない。その位置については諸説があり、共に中央自動車道から、南東側の扇状地端部にかけて設定されている（注13）。

中世に入ると伊賀良庄の記録（注14）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が北条時政で、江馬氏が司り北条氏滅亡後は、小笠原氏の所領となり小笠原氏繁栄の基盤のひとつとなった地区である。また、当遺跡の北方約100mには、佐倉山城跡があり、戦国期においても、何らかの意味を持った地としての位置付けもなされる。

この様に伊賀良地区を歴史的に概観したが、広大で肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地ということができる。

こうした歴史背景のある伊賀良地区内における、本細田北遺跡は、それら伊賀良地区全域を見下す地にあり、地区内で展開された各時代の様々な人々のあり様を見続けて来た場所である。

特に造構の確認された縄文時代、弥生時代においては、かような高所にまで、居住域を求めた当時の生活や、当時の人々の旺盛な生き様が偲ばれる。

注

- 1、小林正春 1987 『飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡』 飯田市教育委員会
- 2、伴信夫・宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
- 3、神村透 1968・69 「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20巻10号～21巻7号
神村透 1982 「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34巻2号
- 4、岡田正彦ほか 1972 『中央道調査報告—飯田市内その2—』 長野県教育委員会
- 5、佐藤魁生 1977 『伊賀良中島平』 飯田市教育委員会
- 6、佐藤魁信 1978 『伊賀良宮ノ先』 飯田市教育委員会
- 7、佐藤魁信 1983 『酒屋前遺跡』 飯田市教育委員会
- 8、佐藤魁信 1983 『鳥屋平』 飯田市教育委員会
- 9、佐藤魁信 1987 『殿原遺跡』 飯田市教育委員会
- 10、佐藤魁信 1988 『小垣外・八幡面遺跡』 飯田市教育委員会
- 11、小林正春 1989 『下原遺跡』 飯田市教育委員会
- 12、市村咸人 1955 『下伊那史』第2巻 下伊那誌編纂会
- 13、市村咸人 1961 『下伊那史』第4巻 下伊那誌編纂会
- 14、宮下操 1967 『下伊那史』第5巻 下伊那誌編纂会

III 調査結果

調査において確認された遺構は次の通りである。

住居址	3軒
土坑	3基
性格等不明の穴	多数

1 縄文時代

1) 住居址

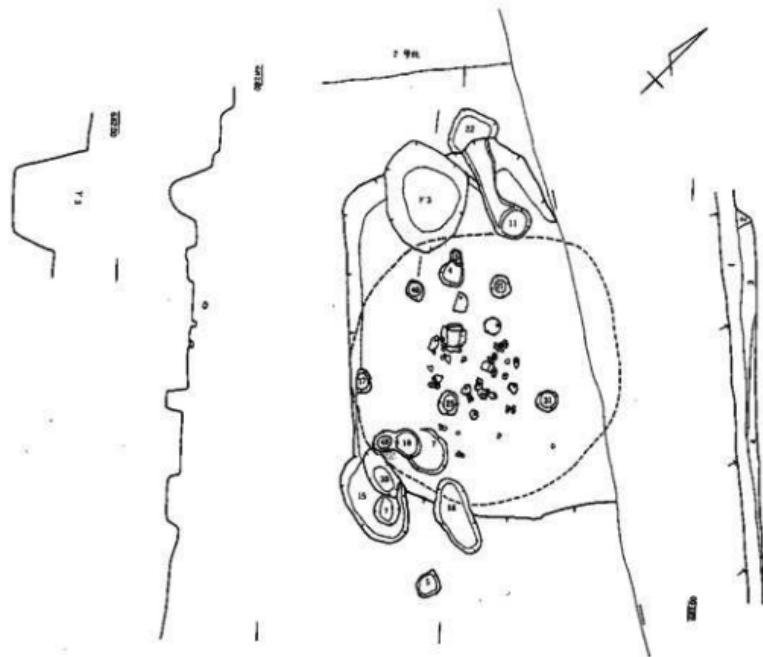
① 3号住居址（挿図4、第1・2・9図）

調査区中央の市道にかかる検出したが、近世の炭焼窯に切られており、壁の確認できた所は無い。推定4m前後の円形竪穴住居址であり、炉の方向から主軸は、N43.5°Wである。検出時、半円形に炭が混入しており、住居址の周溝に入ったものと推定したが、市道の土層断面で炭窯と確認した。挿図に入れた、スクリーントーンの範囲に炭が混入しており、土坑3あたりまで平坦部を作り、窯を築いたと判断された。

炭の出た面から土器・石器の出土があり、縄文時代住居址の存在を確認した。

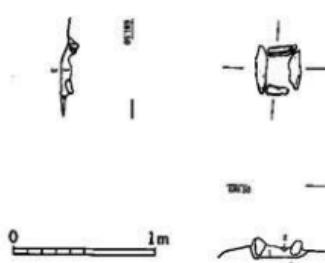
床面の確認はできず、遺物と炉が出土した褐色土中にあったと推定される。穴は数個検出したが、主柱穴と想定できるものはない。炉は方形の石組炉で、小さく焼土もごくわずか認められたのみであった。石は花崗岩角礫を使用している。炉の東側で住居址中央付近に土器、石器が集中して出土した。

遺物は比較的多く出土しているが、土器で全体形の把握できるものは、2個体である。1図1は小形深鉢形土器であり、底部と接合はしないが、胎土・器形から同一個体である。直徑10cm強の円筒形で、胎土・焼成共によく堅緻であり、笠による連続押引文を施している。1・2・3は諏訪地方の藤内II式に比定できる。7は鉢形土器で、口唇部2条とやや下った所に、半裁竹管による押し引き文を施し、体部には縄文がごくわずか残っている。形式の把握はできないが、西日本系と推測した。他は小破片であるが、中期初頭と推測される4・13、藤内系の11・12・14、東海系の8・9・10・15・16は平行沈線文を施し平出III類a系に比定される。石器は乳棒状石斧(17)・打製石斧(18~20・2図1~3)・横刃形石器(4~11)等である。打製石斧には著しい使用痕の残るものがある。10は頁岩製であり粗製の石匙かもしれない。14~16は黒曜石の原石で、デボ状にまとめて出土した。12・13は玻璃質安山岩である。17・18は砂岩礫の砥石で、平坦面を使用している。



1. 黄褐色土→表土
2. 窑の壁・黄褐色土焼土混り
3. 炭・灰・焼土混り
4. 黄褐色土

1. 黄褐色土
2. 黄色土(ブロック)
3. 黄色土(ローム)



挿図4 HSK 3号住居址・土坑3

2) 土 坑

① 土坑1 (挿図5、第3図)

調査区南西端近くに検出した、ほぼ円形の土坑である。直径60cm、深さ20cm余ではほぼ垂直に掘り込まれている。覆土中に土器がまとまって入っており、意識的に入れたものと推測できる。覆土は褐色土の単層で、底部は平坦であった。



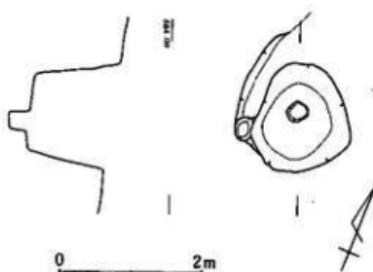
挿図5 HSK 土坑1

遺物は土器と石器か出土した。土器は3図1～7で、1は深鉢形土器の胴～底部であり、実測図の下半分はほぼ現存している。胎土に微石粒が多量に混入しているが、良く焼締っており、諏訪地方藤内I式に比定できる。2～6は小破片で、口縁・胴部であり、2は中期初頭と推測したが、3～6は1と同時期の土器片であろう。7は深鉢形土器の底部で、底は残っているが、胴部への立ち上がり部分はわずかである。8は砂岩の砥石で、部分的に使用され凹部ができる。

時期は縄文時代中期中葉であり、性格は不明である。

② 土坑2 (挿図6、第3図)

調査区西隅に検出した土坑で、台地端部から7m弱の所にある。ほぼ1.5mの不整円形で、130～100cm掘り下げてあり、壁面は垂直に近い。壁の下部と底面は、基盤の風化した花崗岩を掘り下げており、底部に直径30cm、深さ23cmの穴を伴なっている。覆土は大きく褐色土と黄褐色土の二層であつた。



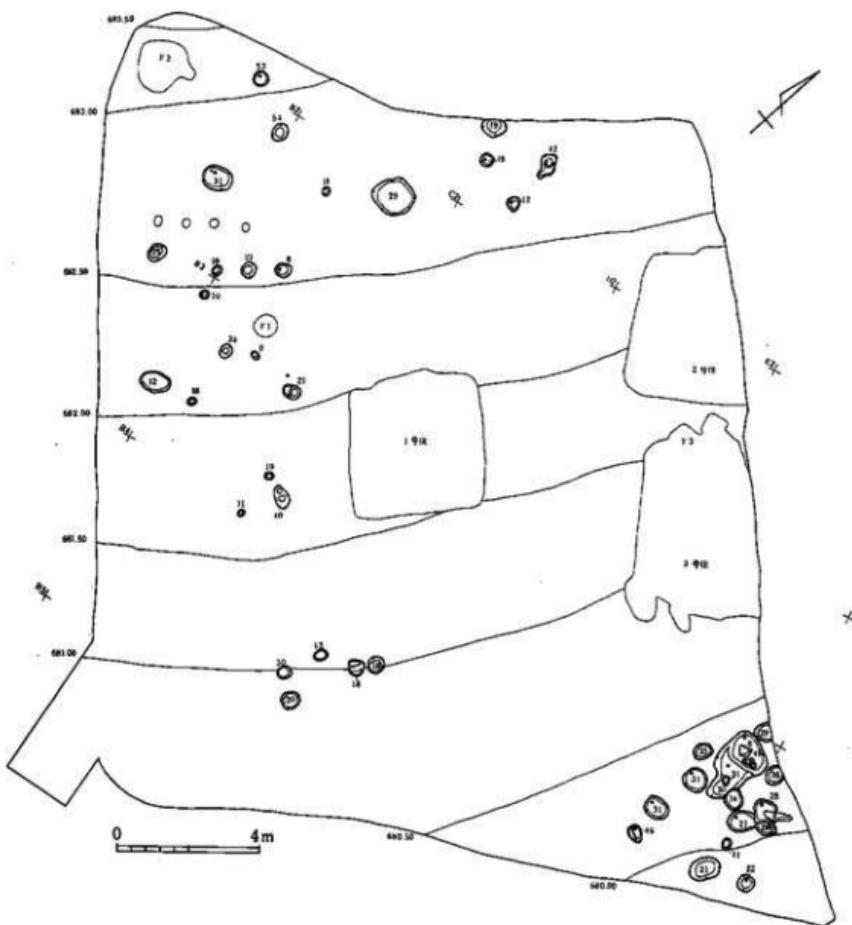
挿図6 HSK 土坑2

遺物は土器の小片4点と石器が出土している。土器は無文の小破片で形式は把握できない。石器は玻璃質安山岩の剥片石器（3図9）と、砂岩の砥石（10）である。剥片石器は雑な剥離であり、左側縁に使用痕の小剥離がある。

規模・形態から、小動物捕獲の落し穴で、底部の穴に尖った棒を立てたと思われるが、時間と共に推測の域を出ない。

③ 土坑3（挿図4、第4図）

台地ほぼ中央に検出、3号住居址、炭窯と切り合っている。3号住居址との新旧関係は確認できなかった。1.5×1.1mの不整椭円形で、切り合い壁上から1m余の深かがあり、壁は急傾斜で、底部は平坦である。覆土は褐色土のほぼ単層であった。

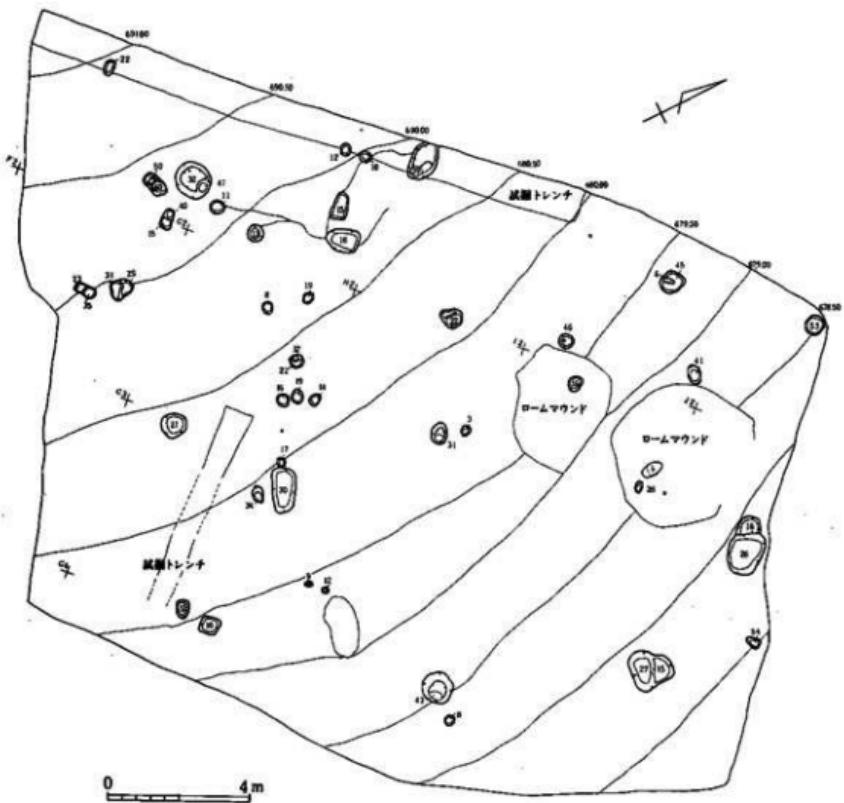


挿図7 HSK 性格不明の穴 (市道より南西部分)

遺物は無文土器小片2点と、石器4点が出土した。打製石斧は硬砂岩製（4図1）と緑泥岩製（2）、共に先端は磨滅している。石錐（4）は硬砂岩で、5は玻璃質安山岩の剥片であるが、使用痕らしいものは無い。

性格・時期共に決め手を欠くが、形態と規模から土坑2と同様な、落し穴と推測した。

3) 性格等不明の穴（挿図7・8、第8図）



穴は調査区ほぼ全体に検出し調査したが、集中する所と散在する所がある。遺物の出土した穴（■▲印）は少なく、時期も決められないが、一部の並ぶ穴は植栽時の植穴と確認したものもある。

F 4・5、G 5グリットには比較的大きな穴が集中し、遺物も多い。4図6～9、5図1～5はこの集中する穴から出土した土器石器である。6は中央の大きな穴両方から出土し、小片は周囲の穴からも出土した。朱彩された深鉢形土器の口縁部片で、隆帯を櫛状工具で押圧しており、地文は縄文である。内側にも隆帯・縄文の施文がある。口唇部には、精円2個を継げた取手状の装飾がある。この様な形態の深鉢は、縄文時代中期初頭に位置づくと推測されるが、形式第把握できない。7は非常に薄く作られており、8は中期初頭に比定できる。他に無文の脚部（5図1）がある。石器は硬砂岩の大きな剥片（2）横刃形石器（3・4）、風化した玻璃質安山岩の剥片（5）、黒曜石片（8図11）などである。床面などの確認はできなかったが、住居とまではいえないが何らかの生活空間としての位置付けが可能といえる。

市道より北東側に、ロームマウンドが何ヶ所かあり周囲に黒褐色土が入っていた。

穴の時期・性格共に確認はできないが、縄文時代から弥生時代にかけての遺構であろう。

4) 遺構外出土遺物（第5・6・8・9図）

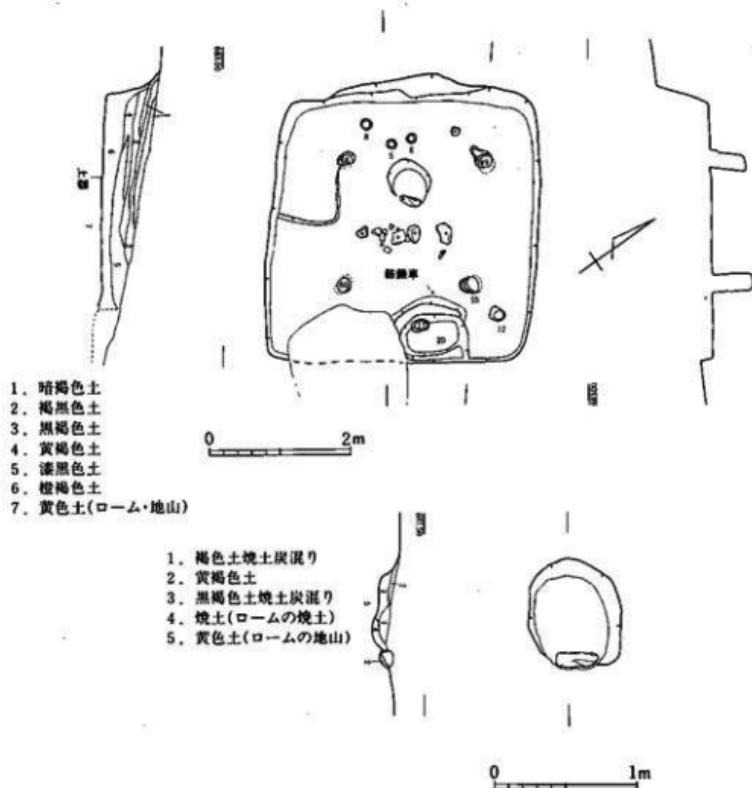
検出時などに、遺構外から出土した遺物であり、グリット一括で取り上げたものである。比較的大きな土器片は、押図9に■を貼付した位置から出土した。5図6～14は縄文時代中期の土器片であり、6はJ 2から出土し、中期前葉に位置づき、8・9の口縁部は中間中葉である。10はJ 3のロームマウンド上部から出土したが、詳細時間は不明であり、12は伊那谷中心に広がる中期後葉の深鉢片である。6図1は縄文時間後期の土器でありH 3から出土した。以上記した土器片は北東斜面のローム層上面から出土し、比較的急傾斜の斜面にも住居址などの遺構があった可能性がある。6図2～14・8図12～17・9図1～10の石器は、縄文時代と確認できないが、遺構外で版組をした。2は打製石斧の先端で著しい使用痕がある。3～6は横刃形石器で、6が泥岩の他は硬砂岩である。7は砥石片で泥岩である。8・9は玻璃質安山岩の剥片で、9は著しく風化している。10～14は硬砂岩で、10は剥片、他は天竜川に産する転石である。11には敲打痕が残っている。8図12～17・9図1～10は小形の石器であり、12は綠泥岩の磨製石器片、13～16は玻璃質安山岩である。17・9図1～5は黒曜石、6～10は様々な色をした海浜石である。

2 弓生時代

1) 住居址

① 1号住居址（挿図9、第7・10図）

調査区南西寄りの、台地ほぼ中央に検出し、南東壁を現代の穴に切られる。不整方形の竪穴住居址で、規模はほぼ3.8m四方であり、主軸方向はN53.5°Wを測る。覆土は大きく2層に分かれ、上



挿図9 HSK 1号住居址

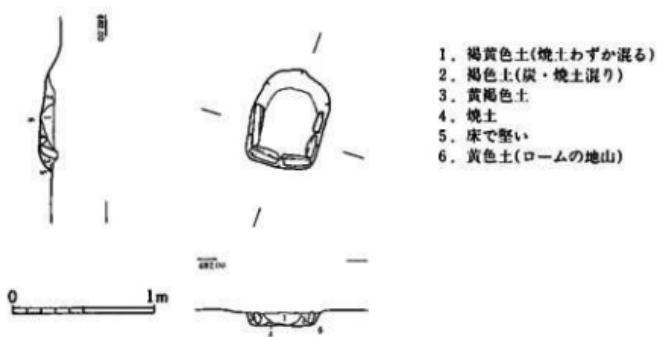
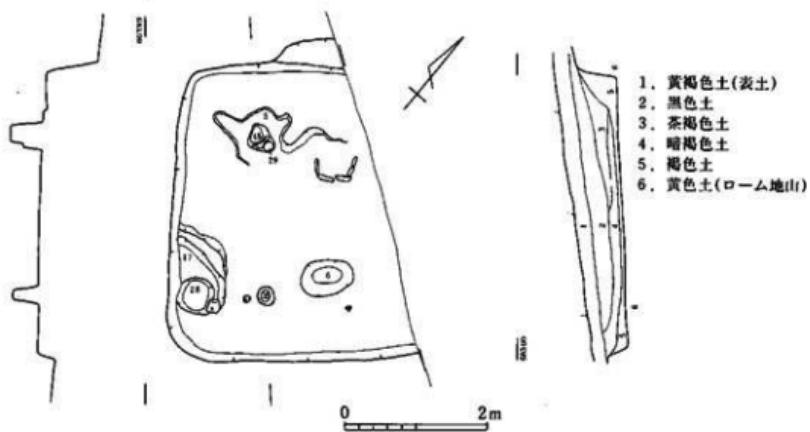
層は黒色土、下層は褐色土を主体にした土が入っており、検出面の黒色土は、ほぼ円形であった。土層断面では、凹レンズ状にきれいに入っているが、斜面に掘り込まれている為、やや傾斜している。壁高は74~20cmであり、ほぼ垂直に掘られている。床面は堅くタタキ状で、入口方向へ8cm前後傾斜している。主柱穴は4本で、掘り方は直徑30~20cmの不整円形で小さいが、深さは床面から66~49cmあり、やや斜に掘られている。炉は床面中央からやや奥壁寄りにあり、炉縁石を持つ地床炉である。炉縁石側が良く焼けて、堅くなっていた。南東壁中央からやや東寄りに、入り口施設の穴があり、外側の床面が3cm前後土手状に高くなっていた。

遺物の出土量は少なく、土器壺・高杯の破片と石器である。壺は(7図1・2)で、1は底部と直接は接合していないが、同一個体である。2次焼成により器面が荒れ、頸部に波状文がわずか残っているのみである。2の壺片には波状文と、2段の斜走短縞文が施される。壺(4~6)、4は小片で器面も荒れ、口唇部の立ち上がりにも施文があるらしいが、確認はできない。高杯(3)は脚部の破片であり、穴1箇所が確認できる。石器は紡錘車未製品(7)、敲打器(8)、砥石(9~11・10図1)器種不明(12~14)である。紡錘車は穴をあけるだけになってしまっており、安山岩製である。砥石は10が緑泥岩の他はすべて砂岩である。敲打器8と器種不明の12は砂岩であり、砥石の可能性もある。器種不明の13・14は、玻璃質安山岩で小型の石器であろう。10図2は炉縁石であり、壺母の多い砂岩である。

② 2号住居址 (挿図10、第8・10図)

調査区ほぼ中央、市道にかかるて検出し、約%調査した。方形の竪穴住居址であり、確認できた一辺は4mである。主軸方向はN38°Wを測る。覆土は大きくわけて、黒色土と褐色土の2層であり、地形にそっての傾斜はあるが凹レンズ状にきれいに入っている。壁高は斜面を掘り込んでいる為、72~25cmであり、垂直に近い立ち上がりである。床面は堅くタタキ状で、貼り床状に2枚になっている部分もあり、地山と同じ方向に約10cmの傾斜が付いている。主柱穴は2本確認、掘り方は不整円形で小さいが、深さは45.35cmである。西隅の柱穴は2箇あり、柱の立て替えも考えられる。炉は床面中央からやや奥壁寄りで、コの字形に炉縁石を埋めている。炉縁石は奥壁側がやや開きぎみで、すべて花崗岩であり、節理面で割れた、平坦面のある角礫を用いている。掘り方は10cm前後と浅く、底部のロームが焼けている。南隅近くに穴があり、北西側床面がやや高く土手状になっており、入り口施設である。穴の東側から砥石が出土した。

遺物はわずかで、土器10片余と石器である。土器はすべて壺・壺の無文部小片で、図化可能なものは無い。石器は磨製石包丁・打製石斧・凹石・砥石などである。磨製石包丁(8図1)は完形で、灰色の粘板岩。凹石(5)、砥石(6~8)は砂岩で、打製石斧(2)、敲打器(4)は緑泥岩である。他に黒曜石(9)、海浜石(10)が出土している。



挿図10 HSK 2号住居址

出土土器による時期の推定はできないが、住居址の形態・石器及び、1号住居址との位置関係から、同時存在の住居の可能性も強く、これと前後したとしても、同一時期内と考えられる。

IV まとめ

中央アルプス前山の山麓に位置する、細田北遺跡の発掘調査を行なったわけであるが、広域農道の路線という限られた範囲のため遺跡全容の把握には至らなかった。調査区は山稜が舌状台地に変換した位置にあたり、一定の台地巾を有し、生活水源である沢との比高差もごくわずかの地という場所での遺跡のあり方が一部確認されたわけである。台地は南東へ向って、長さ400m余巾70~50mで継長に延びており、遺跡の主体は調査区よりやや下方とも推測されるが、異時代の遺構が検出された本地点も、集落の中核の一端を担っていたと判断することも否定できない。いずれにしても今回の調査により、遺跡（集落）の一端を把握したことは明らかであり、それらのいくつかを整理すると以下のようなである。

昭和63年11月に試掘調査を行ない、縄文時代の土器・石器が出土したので、縄文時代の単純遺跡と判断し調査を実施したが、弥生時代の遺構も出土し、複数の時代にわたる遺跡である事が確認された。

縄文時代の遺構・遺物は、中期中葉の住居址・土坑・穴などと、それらに伴なった土器・石器が出土した。住居址は中期中葉であったが、遺構外遺物には後期の土器片もあり、縄文時代全般にわたっての生活地であったといえる。

特に、今回の調査で確認された竪穴住居址は1軒のみであったが、中期中葉前半期の当地方における調査例の少ないものである。たまたま遺構の残存状態が悪く、その具体的な姿を描格に捉えることはできなかつたが、一定の意味を持つものであったといえる。

また山際の狭小な台地上に営まれた住居であり、その地形的制約から多くの家による大集落の存在は考えようもない。このような小規模集落が、当時の食糧獲得等一定地域内における生活形態等を研究するに重要な意味を持つものと考えられる。隣接するいすれかに存在するであろう大集落との位置あるいは、有機的関連等の検討が今後の大きな課題といえる。

時期・遺跡立地・遺構の構成等、調査類例の乏しい当地方において貴重な発見であったといえるとともに、今後の該期研究上、かつ、地域の歴史解明上大きな指針を与えてくれた発見といえる。

弥生時代後期の住居址2軒の出土は、予想だにしていなかった事で、今までの考え方では捉えきれない、居住地の広がりの事実が示された。今までに当地方における高所の居住地としては、高森町月夜平遺跡及び市内上久堅北田遺跡が、650m前後の標高にあり、これらを約30m越えた高地に発見された事で、現状では、隣地である梅ヶ久保遺跡とともに弥生時代最高所の集落といえる。

この集落の生産基盤は、舌状台地西側の谷地水田の経営が考えられる。磨製石包丁の出土はそれを裏づけているが、それのみでなく南西側の浅い谷、細田沢川を越えた梅ヶ久保遺跡前面に広がる、広大な扇状地の利用も考えられ、稻作に限定された農業ではなく、畑作等の多面的な農業技術の向上が推定できる。

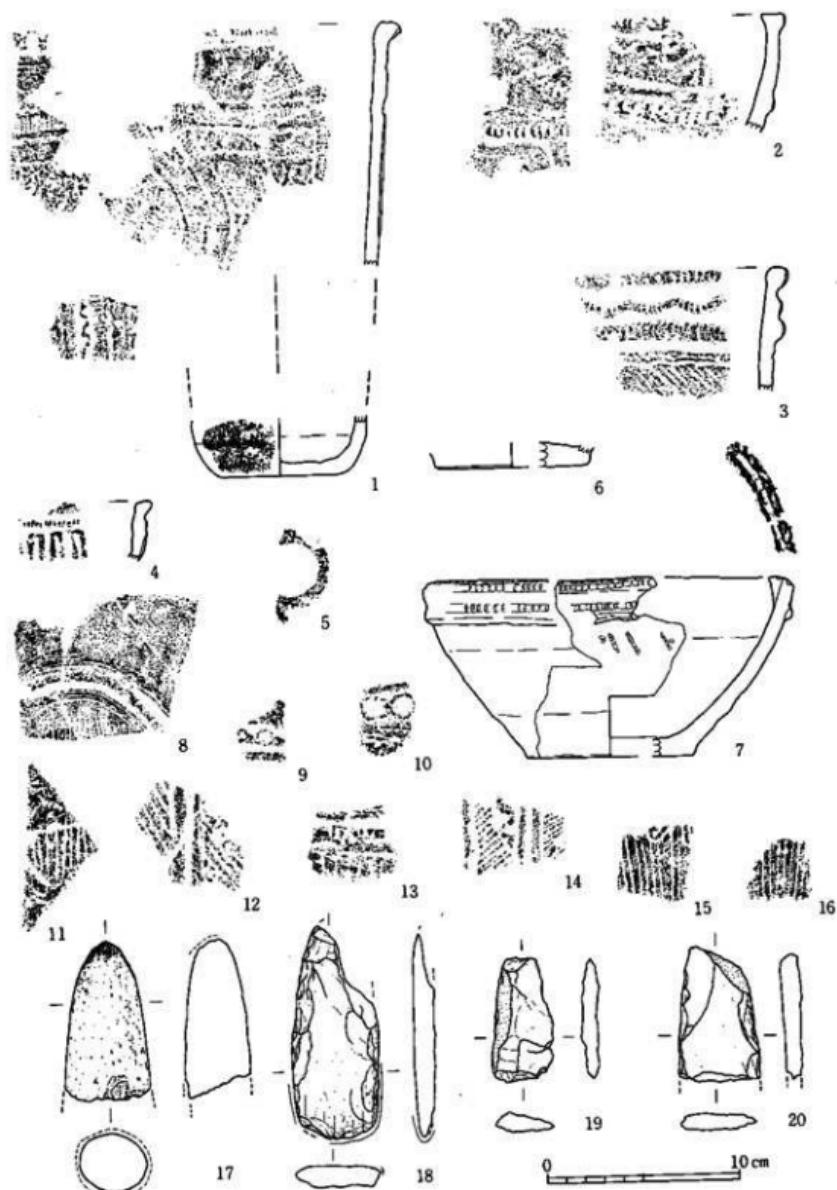
弥生時代後期からの一定期間において気候の変化などの自然環境とも強く関連して、居住域・生

産域の拡大が当地方にあったことは、本遺跡の調査を待たずに、既調査の月夜平・北田遺跡などにより、指摘され続けて来た所であるが、今次調査により、天龍川の東西にまた、当飯伊地方全域にわたっていることが強く示されたものといえる。

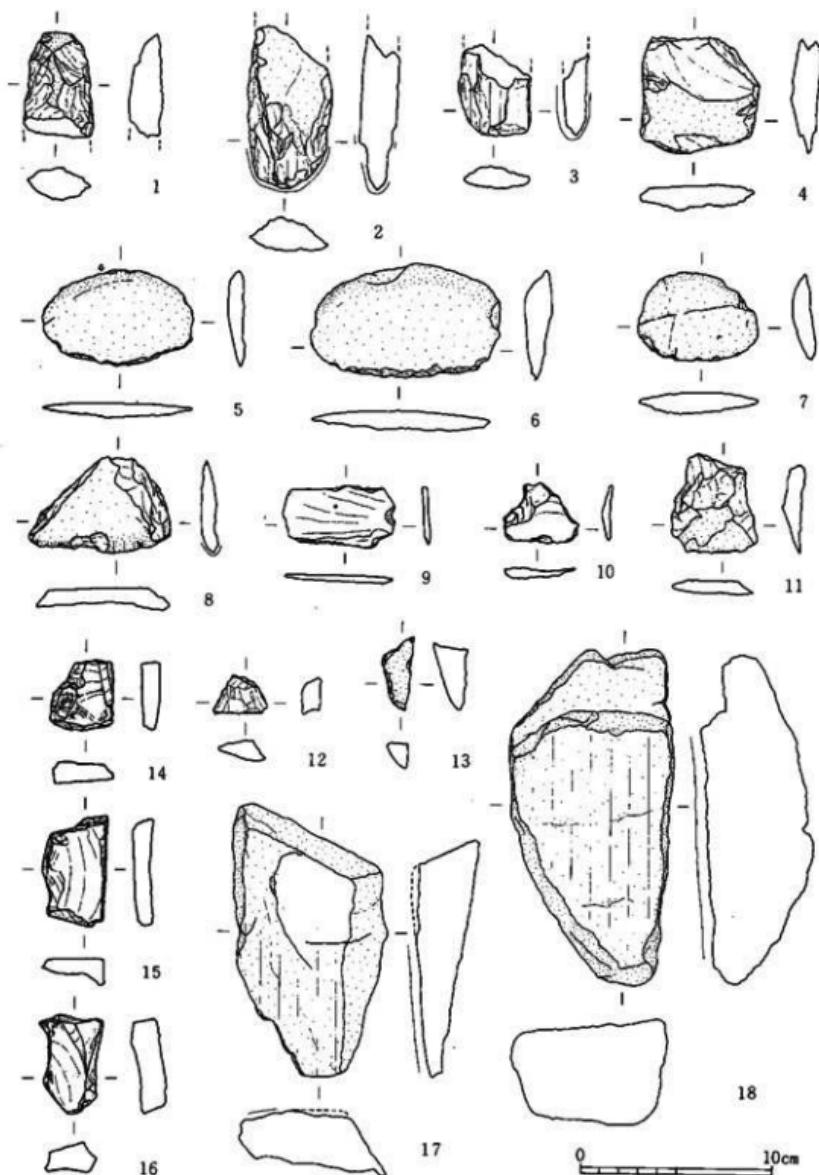
一方、当遺跡にみられる、該期の小規模集落における生産基盤等の生活条件は、最大限にみても、天龍川沿岸に近い広く、かつ肥沃な地区と比較すれば、諸々の点で劣悪である。当然、後者により大規模な集落が構成され、それが、当地方における中心的な役割を果していたといえ、その周辺部としての、本遺跡例などにみられる小規模集落の存在した姿が地域全体のあり方として読み取れる。また、そうした姿自体が該期における地域性を特徴づける1つとして示されるとともに、次時代以降現代にわたっての、伊那谷の特性が具現した端緒よも捉えられる。

以上、今回の調査結果につき若干の整理をしたが、いずれにしても山麓に立地する遺跡の調査は、伊賀良地区ばかりでなく飯田下伊那地方においても、調査例がほとんどなく、先年調査した梅ヶ久保遺跡に本細田北田遺跡の調査とを合わせて考えるとき、新しい知見を得ることができ、今後の学術研究あるいは地域の姿を考える上で大きな役割を果すものといえる。

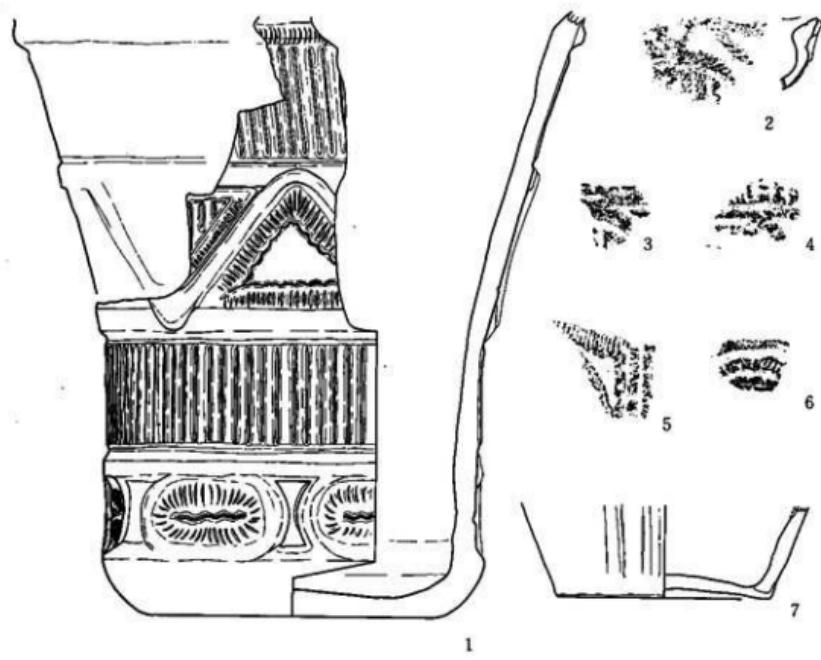
図 版



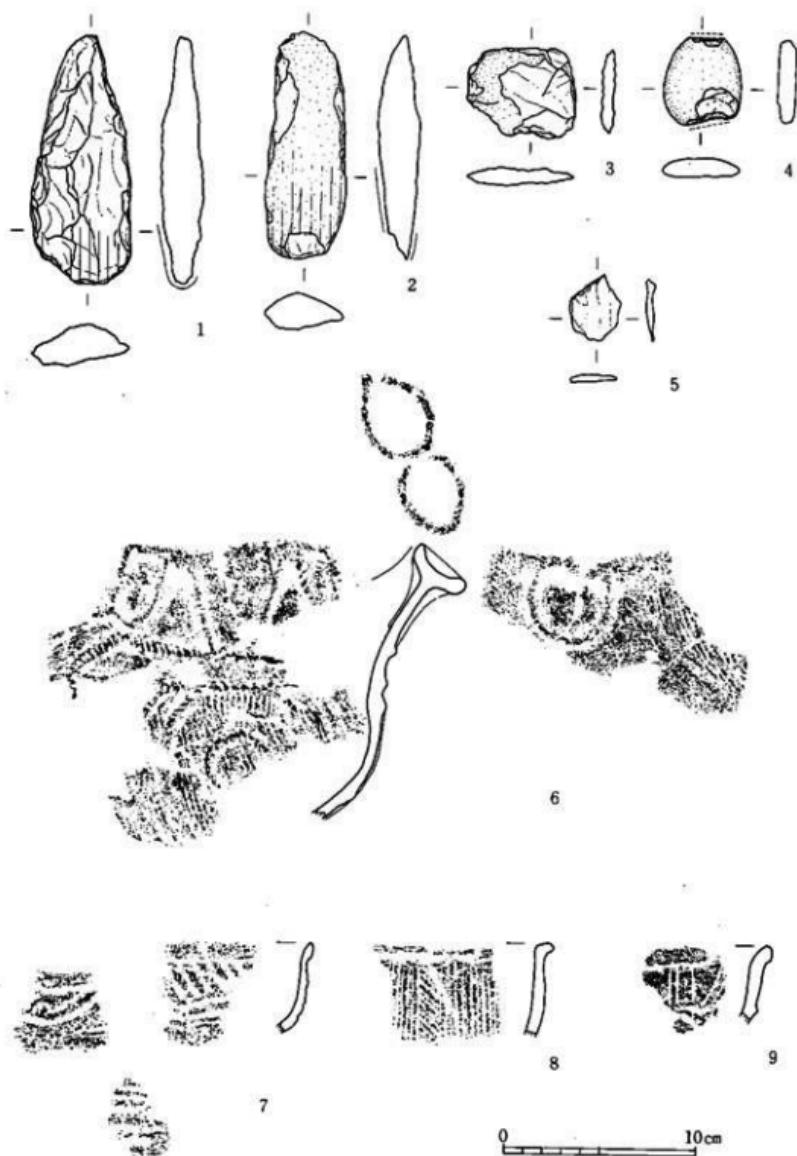
第1図 HSK 3号住居址出土土器・石器



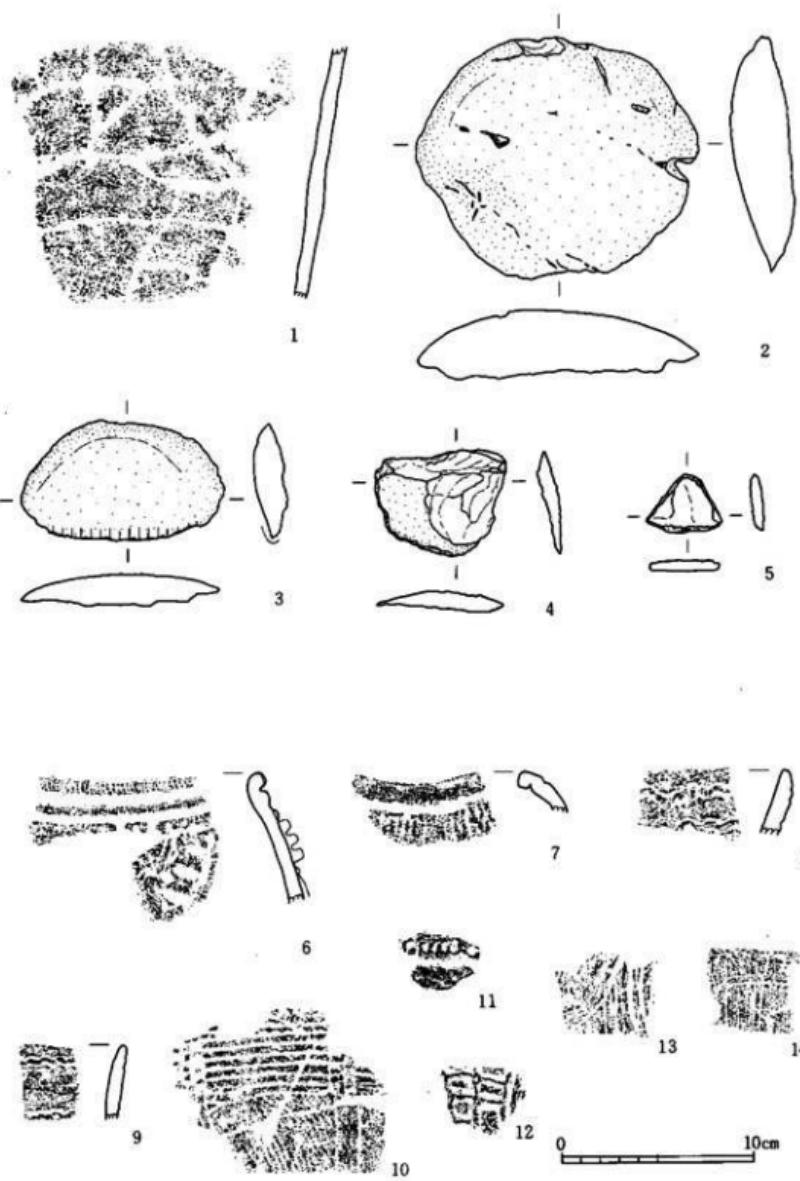
第2図 HSK 3号住居址出土石器



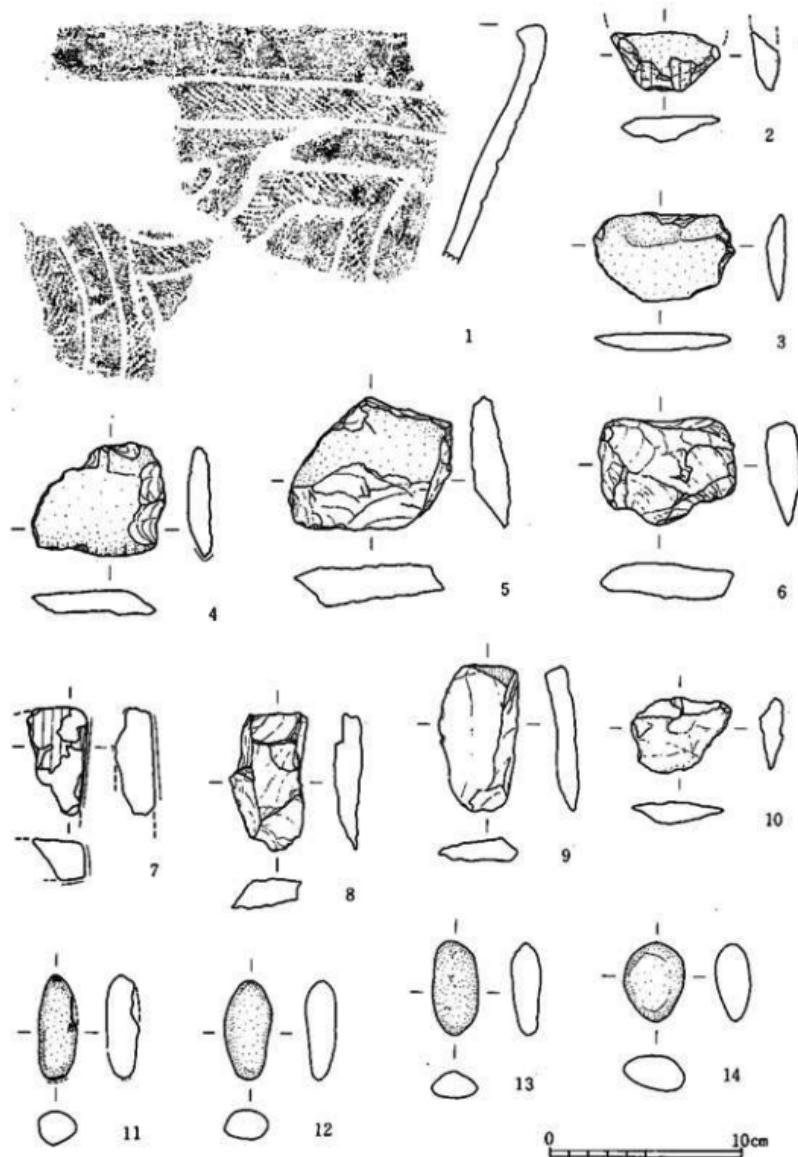
第3図 HSK 土坑(1~8)、土坑2(9・10)出土土器・石器



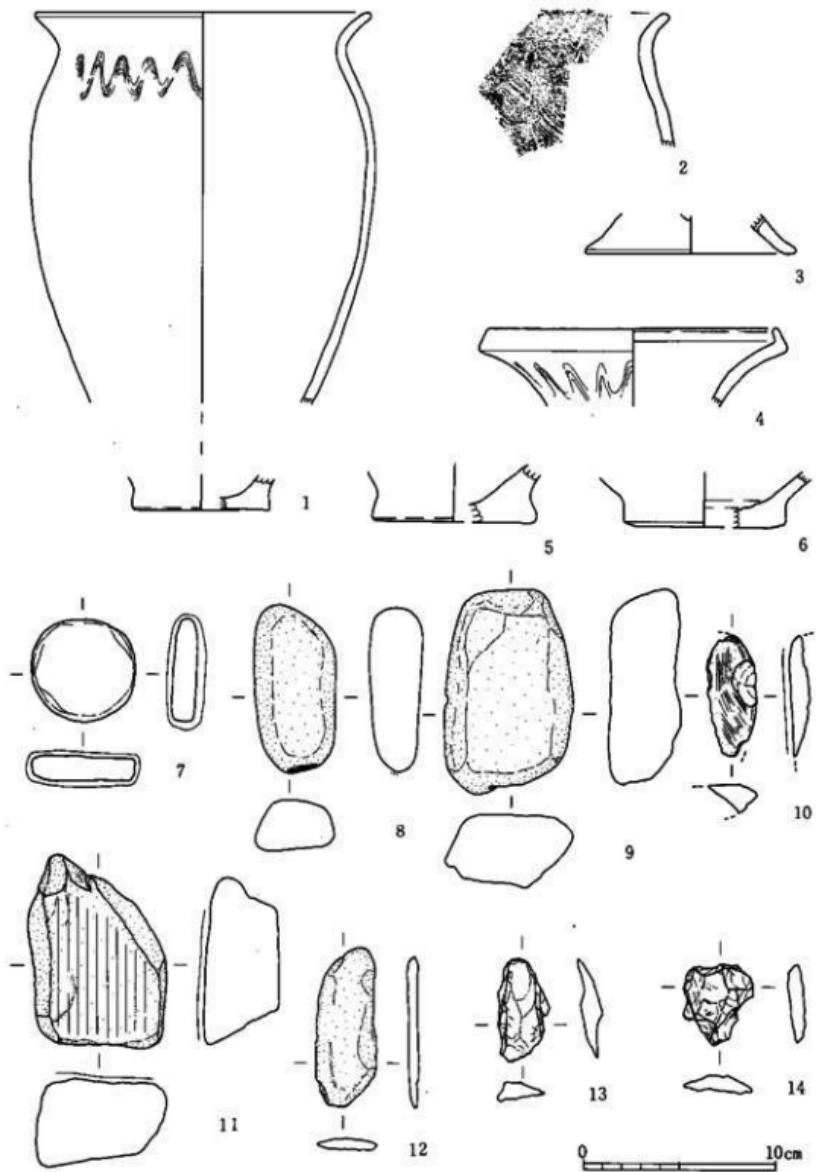
第4図 HSK 土坑3(1~5)、性格等不明の穴(6~9)出土土器・石器



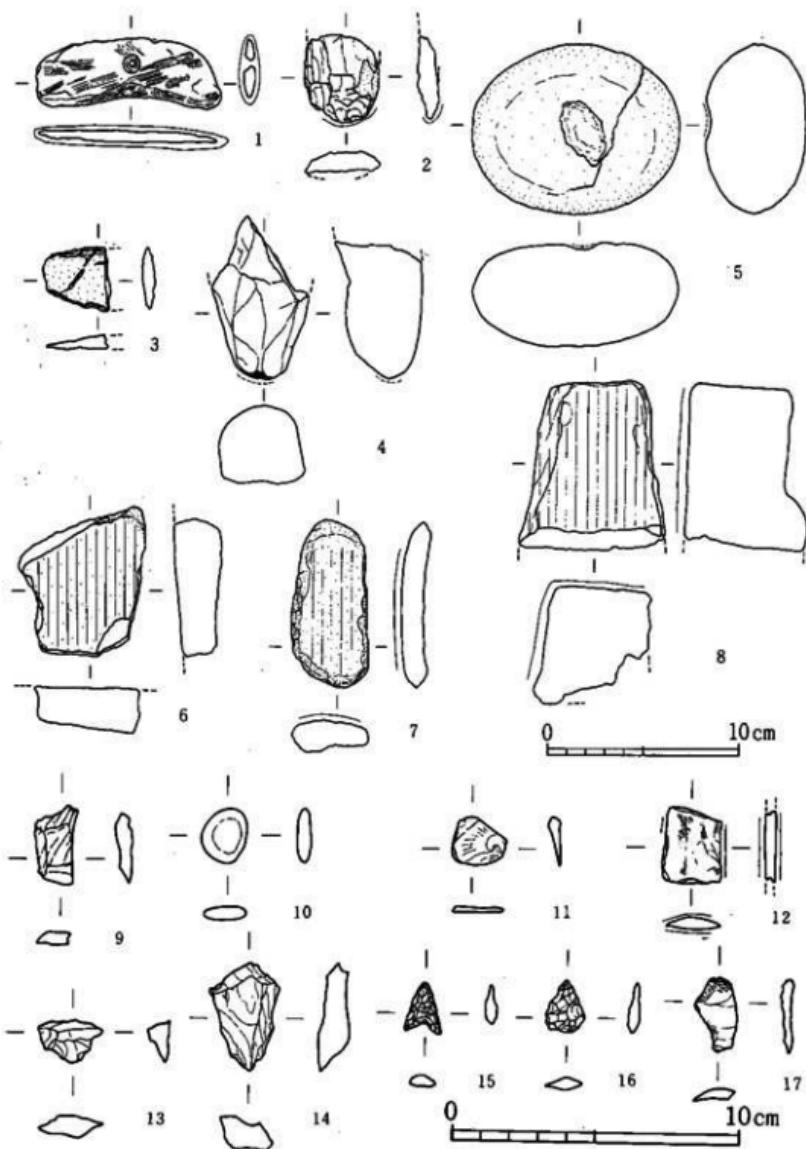
第5図 HSK 穴(1~5)、遺構外(6~14)出土土器・石器



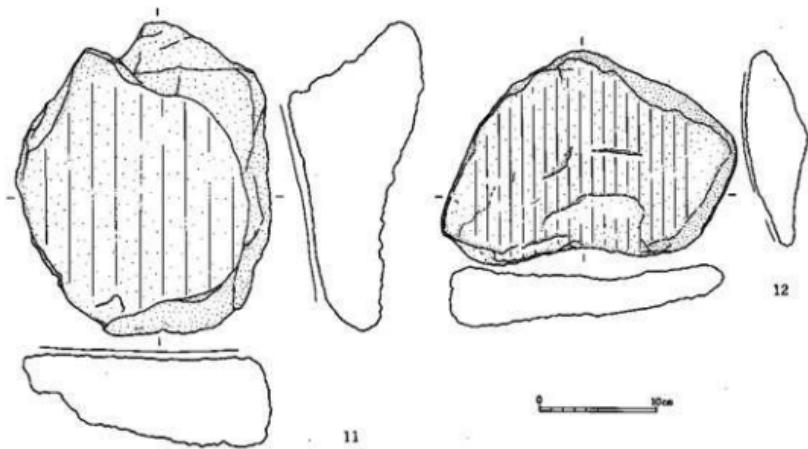
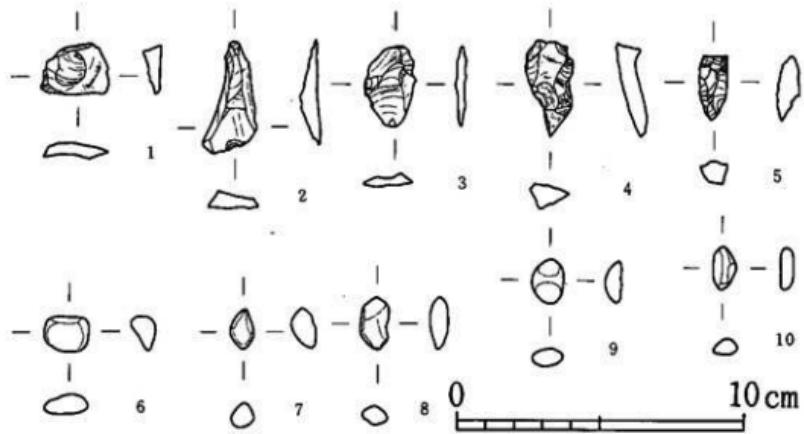
第6図 HSK 造構外出土土器・石器



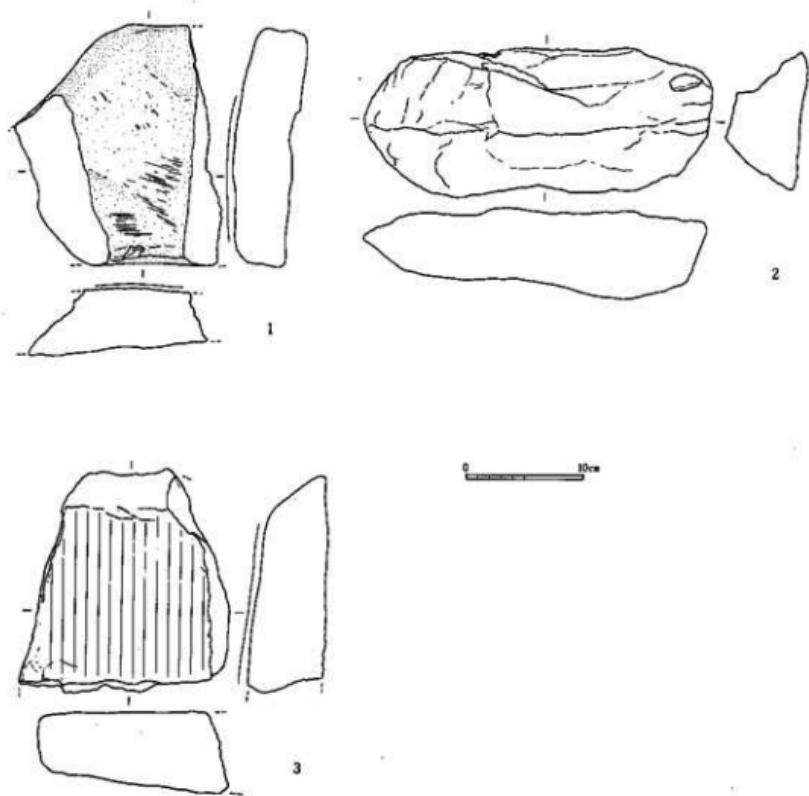
第7図 HSK 1号住居址出土土器・石器



第8図 HSK 2号住居址(1~10)、穴(11)、造構外(12~17)出土石器



第9図 HSK 造構外(1~10)、3号住居址(11・12)出土石器



第10図 HSK 1号住居址(1・2)、2号住居址(3)出土石器

写 真 図 版

図版 1



調査前 北東より



市道から南西側 遺構分布状態



市道から北東側遺構分布状態

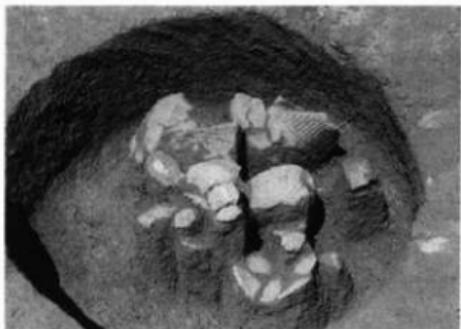
図版 2



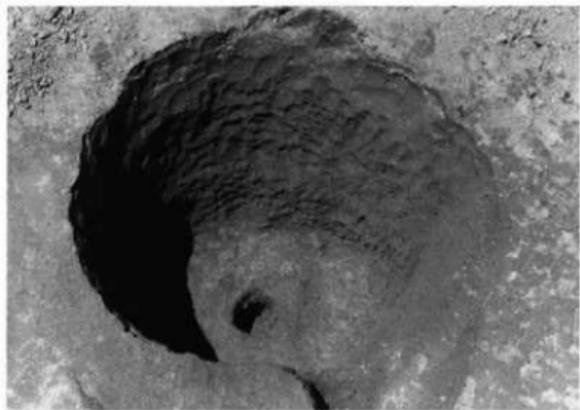
3号住居址



同 炉

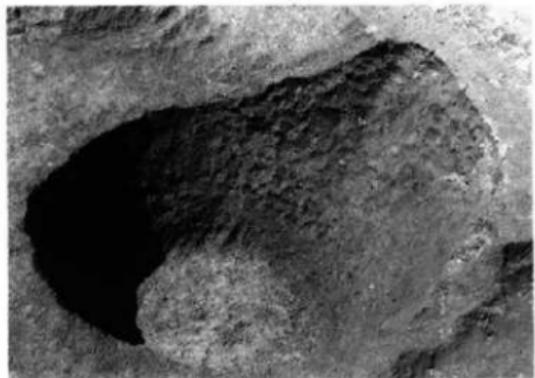


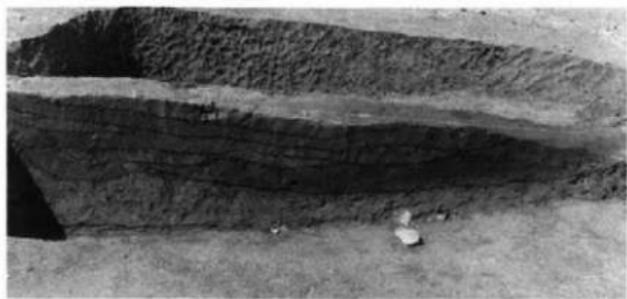
土坑 1



土坑 2

図版 3

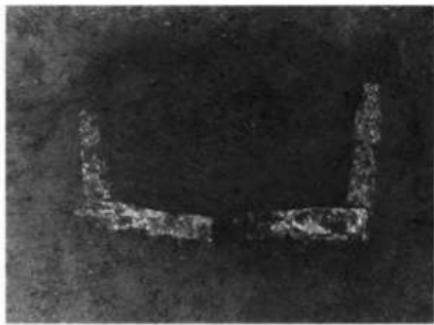




1号住居址 土層断面

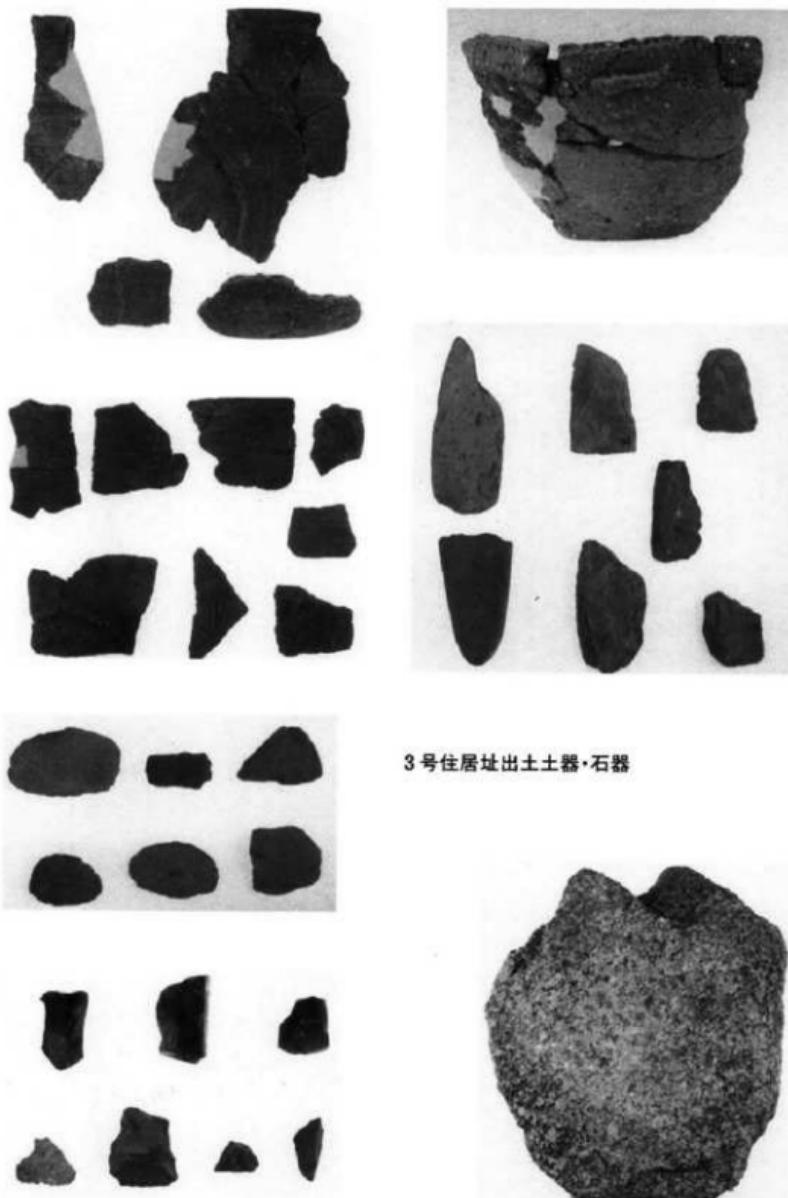


2号住居址



同 炉

图版5





土坑1出土土器

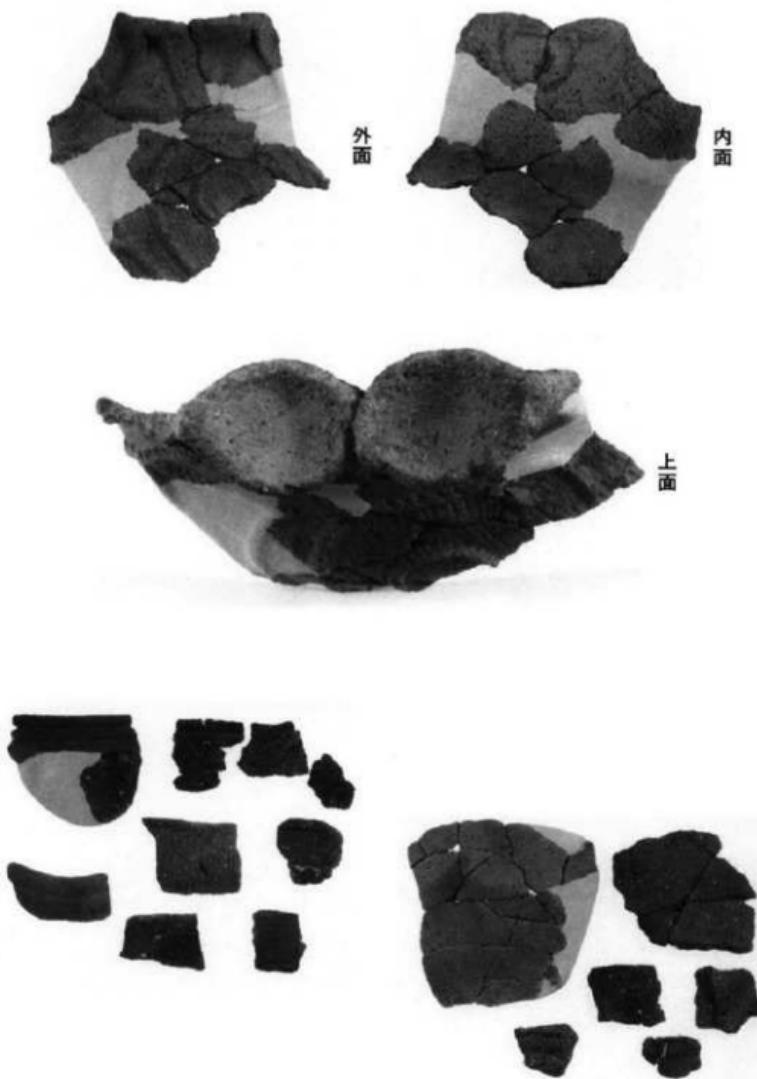


土坑2出土石器

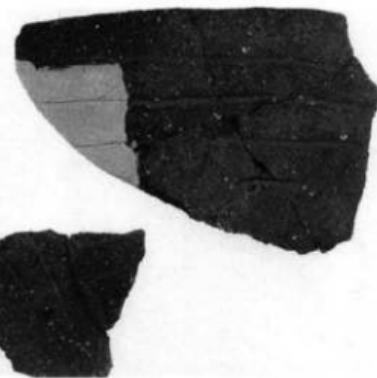


土坑3出土石器

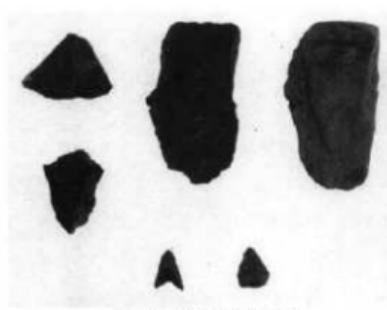
図版7



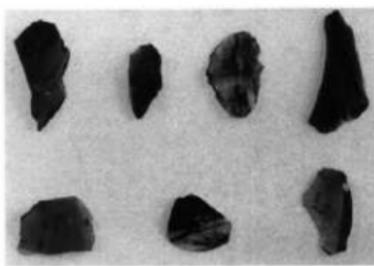
性格等不明の穴・造構外出土 縄文時代中期土器



造橋外出土縄文時代後期土器



玻璃質安山岩製石器



黒曜石



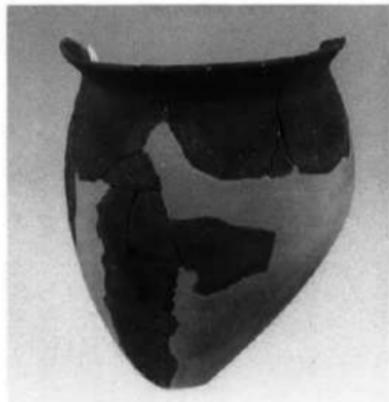
海浜石



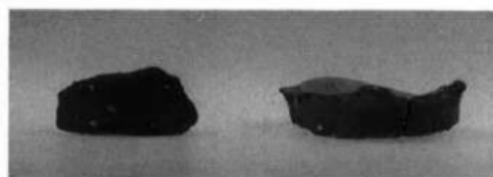
磨製石器

造橋外出土石器等

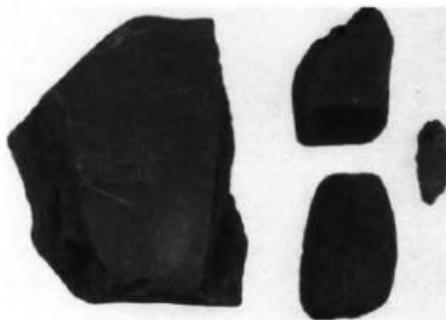
圖版9



高坏脚片

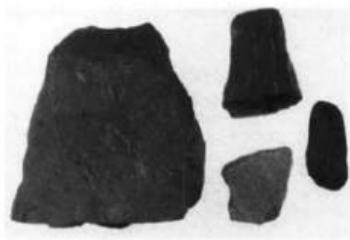
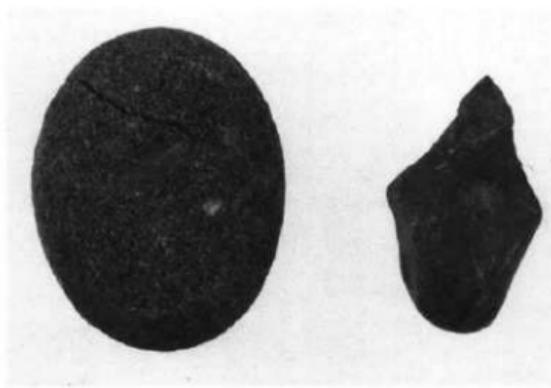
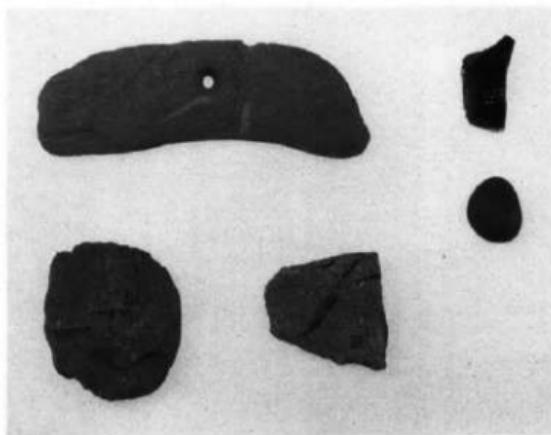


纺锤车未製品



砾石

1号住居址出土土器·石器



2号住居址出土石器



調査風景



伊賀良北方区議員視察

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

細田北遺跡

1990年3月10日 印刷

1990年3月15日 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

